

〈基調講演 ①〉

「ユーラシアを西から東へ駆けた斑動物たち、 そして尾駁の駒へ —斑馬は聖獣だった—」

富山大学・聖徳大学 名誉教授 山口 博

はじめに

山口です。 えー、私も 80 の半ばになりましたら、毎朝、こうやって鏡を見てひげを剃りますでしょ。いつのまにやら、顔にシミが出て来るんですよ…。あるいはアザのような。それが年を取るにしたがって、こう増えてくるような感じがしましてね…。そのうちにどうなるのかな？と思っておりまして、気にはしてはいたんです。

私、富山県の出身…。出身は東京なんですけれども、富山の方に長く居ましたら、この頃、新聞の広告にですね。富山の薬品会社がシミ取りだとかの薬を作ったという、大々的な宣伝をやっているのをご存知ですか？ いや、広告の宣伝なんかしなくてもいいんですけれども…。それで、そういうことを気にしておりましたら、こちらの会長さんの相内さんの方からですね、「尾駁の駒」の話をしてくれないかと話があったんです。

自分の駁(ぶち)の話ならできるけれども、「尾駁の駒」の話をするのかな？と、気になっていたんですけれども…。ふと、思い返してみましたら、私がまだ、平安時代の和歌を研究をしている頃に対象としていたのが、第二代目の勅撰集の『後撰集』なんです。その『後撰集』の中に「尾駁の駒」が出て来ましてね。それで、それがかつてやっていた…。「かつて」と申しまして 4～50 年前になりますけれども。やっていた時には、別段、何も気にしないで、「あっ、尾駁の駒というのは、非常に気性の激しい荒々しい馬なんだ」という通り一遍の解釈しか、実は考えていなかったんですね。

ところがその後になりまして、だんだんと研究の方向が変わってきまして、日本古代の神話、文化、あるいは『万葉集』を考えて行く上で、「これはどうも、日本の国内の事だけから考えていたのでは、不十分な点がある…。もちろん、比較文学という研究分野があります。これは文献を比較するんですね。しかし、文献の比較だけじゃなくて、「もっとグローバルな文化全体から見なければいけないんじゃないかな？」ということに目をやっているうちに、だんだんと目が向いてきましたのが、“斑(まだら)模様”の動物だったんです。

それで、今回話しますのは、“馬”ということに限定しないで、もっと広く、「何で“斑の動物”が、このようにたくさん、ユーラシアを駆け巡っているのか？」という視点から、お話をしようかと思えます。

1 何んと多いまだら馬を表す漢字

まず、一体、「まだらの馬」というのは、どういうふうに漢字で書くのか？ということを考えてみました。これ、「斑」という字を見ますと分かりますように、あの王様の「王」を二つ

書いて、真中に「文」を書くと。これが普通ですよ。ところが辞書を見ますとね。資料の5ページをご覧ください。その第一、「何んともいまだら馬を表す漢字」があるかと、ずうーっと並べたんですが、まだあるんです…。これ全部、「駁」っていう字なんですよ。「駁(はく)」という字から始まって、「驄(すう)、鶩(しつ)、駟(ぼう)、騮(か)、騮(りゅう)、驛(た)、驛(ひょう)、驛(げん)、驛(ぜん)…」と。こんなにたくさんあるということは、「駁」っていうものは色々な種類があるということで、それで「駁馬」は一体、どんなに種類があるかと調べましたら、全部で“100種類ある”っていうんですよ。100種類…。そんなにありますとね、もう、どういふふうに判断したらいいかわかりませんで、100種類の「駁馬」をずうーっとここに並べればいいんですけども、それができなかったもんですから、ただ“100種類位に分類ができるぞ”ということと、“漢字がたくさんある”ということをお伝えしておきます。それだけ、中国においては、微妙にですね、馬を尊重して細かく見ていた、そういうことだったんですよ。

2 尾駁の馬はどこにいるの？

それならば一体、その問題の「尾駁の駒」、馬というのは、どこにいるのか？ということですよ。第一番、日本。これは“陸奥(みちのく)の「尾駁の牧」にいる”ということは、これは、確かなんですかねえ？これ消しちゃいますと、今日の話が無くなっちゃいますもんですから、とにかくこれを挙げておきます。他には、ちょっとそう思い当たらないんで、“陸奥にいたんだ”ということだけは、言えるかもしれないですね…。

昨日、八戸の方を車で走っておりましたら、あそこに“馬淵川(まべちがわ)”っていう川が流れていますね。今は、「馬」という字と、それから「淵」の川の「淵」と書いてありますけど、“馬淵川”。そこで、馬の行事をやっているっていう話を聞きました。あの「淵」は、おそらく、斑の駁(ぶち)だったんじゃないですか？ きっとね…。“馬淵川”。あそこも、おそらくひよっといたしますと、尾駁の馬と関係があるところかなあというふうに思っていたんですけども…。とにかく、日本ですと、陸奥にあって、後は『後撰集』と『蜻蛉日記』の中にいる…。これだけです。

それで、お隣の中国を見てみますと、駁馬国(はくばこく)にいる…。「駁」は斑の字ですよ。それならば、その駁馬のいる駁馬国はどこにあるかいうと、一番、「駁馬国は南海にあって駁馬を輸出すると」。南の方の海にいるっていうんですよ。二番目は逆で、「駁馬国は突厥(とっけつ)の北で、北海に近い所にいる。都から一萬四千里離れている。木が埋もれるほど雪深く、春になると馬犁(ばすき)で種を植える。駁馬には乗らないで乳酪(チーズ)を採って食べる。馬の色が駁なので、駁馬国と言う…」と。いうふうなことが中国の文献には書かれているんですよ。

その次、駁馬国というのはだんだんと現実性を帯びてきます。「駁馬国から宋の国に朝貢使一団がやってきた。現実に存在する新羅(しらぎ)、百濟(くだら)、高麗(こうらい)、吐谷渾(とよくこん)という「中国青海省」ですが、罽賓(けいひん)・曹国(そうこく)からも朝貢使が来たということと並んで、駁馬国からの朝貢使も来た」とありますので、駁馬を産出する駁馬国というのは、現実に存在していたということだったんですよ…。

そして、その次、「駁馬国はウイグルにある。雪が積もって、馬で田を耕す。駁馬というのは、黒色で駁がある」。それで国名を駁馬国というんだと。ウイグルなんです。現在、ウイグルとい

うとシルクロードの西の方のトルファン辺りになっておりますけど、かつては、ずうーっと北にあったんですね。そうすると、この駱馬というのは、何となく雪が降っていて、そして北の方という、このニュアンスを伴っているということは、どっか青森県によく似ているというような話だなぁ〜と。ただ、チーズを作って食べるというのはおもしろかったですね。

それから中国を離れまして、西の方に行きまして、ウズベキスタン。「天馬が西の果ての大宛(だいえん)大月支国・フェルガーナ(ウズベキスタン)から沙漠をわたって来た」。これは、李白の詩でありますから、唐の時代。「背中は虎文があつて、竜骨の翼をもっていると。天馬に似ている…。しかし、背中には虎の紋をもっていた」。そして、次の宋の文帝の時には、「赭白(しゃはく)馬が西の果てからやって来た」ということで、だいたい白色の栗毛の馬なんで、西の果てからやって来たということは、やはり中国というよりは、もっと西の方より駱馬が中国にやって来たということを、古代の中国人は考えていたようです。

これで日本、中国、ウズベキスタン、インド。細かい記述を省略いたしましたけれども、『リグ・ヴェーダ』という西暦前 13 世紀の文献にも駱馬が出てきますし、それから、ペルシアにもですね。『シャー・ナーメ(王書)』という本には、はっきりと駱馬が出てまいります。ということは、日本だけではなくて、ユーラシアの西から東にかけて、駱馬というものがこのように駆け巡っていたということが分かります。

それゆえ、中国で言う駱馬国というのは、つかみようがないんですけれども、大体は西の方を考えていたらしいということが分かってまいります。

3 尾駱の馬はどんな馬？

それでは一体、「尾駱の駒」というのはどんな馬なのか？ってことです。どんな馬なのか？“斑のある馬”である…。そうなんでしょうけれども、やはり、その性格というものを、どうしても知りたくなってくるんで…。

まず、日本から見て行きますと、陸奥の尾駱の駒っていうのは、非常に荒々しい馬だというふうに一般には考えられております。その根拠になりますのが、皆さん方もよくご存知の、私が非常に興味を持っていた『後撰和歌集』に出ている詠み人知らずの歌です。『後撰集』の詠み人知らずの歌というのは、これは『後撰集』の時代より、もっと遡(さかのぼ)る人たちの歌も入っている可能性があるんで、必ずしも、これは平安中期ということにならないかも知れない…。もっと早いかも知れないですね。

「陸奥の 尾駱の駒も 野飼ふには 荒れこそ増され 懐くものかは」

「陸奥の尾駱の駒も、野に放牧していると、ますます荒れ勝ってきて懐くことがないよ」という歌が根拠になりまして、単純にですね、尾駱の駒っていうのは、気性が激しい荒い馬なんだというふうに注釈が付けられております。

それから、次の二番目、百済からの渡来人の田辺伯孫(はくそん)という、この名前を見てわかりますように渡来人です。この乗馬が「驄馬(みだらをのうま)。「駱馬」と書きまして「みだらを」と発音しております。「驄馬」とは、竜のごとくに翔ける赤駿(あかうま)と競争する程の速力を持っていた。そして、その「驄馬」というのは青白の雑色の馬で、いわゆる葦毛といわれて

いる、それも斑の馬であった…と。つまり、斑の馬で、竜のごとくに翔ける馬と競争したというんですから、非常にスピードを持っているということが分かります。これが日本の文献からわかる「尾駁の駒」というもので、気性が激しくて、非常にスピード感がある、馬力を持っている馬というふうに考えられていたんだということになりますね。

その斑馬を非常に細かく描写しているのが、実は、このペルシアのですね…。先ほどありました、古代ペルシアの英雄叙事詩の『シャー・ナーメ(王書)』というものです。10世紀の頃書かれていて、伝説はもっと早いんですけども、そこにですね、非常に細かく、斑馬とはどういうものかということが書いてあります。

「英雄ロスタムの馬、竜馬ラクシュの灰色の母馬の胸は獅子のよう、腰は短く、耳は輝く短剣のようであり、胸と脚は太いが、しかし胴は細く締まっている。その後から似た大きさの若駒が一頭続くが、その腰、その胸は母馬のそれと同じくらい頑丈で、目は黒く尾をふりあげ、睾丸は黒く固く、鋼のような蹄。体中に斑があって、それはサフランの黄色の地に赤いバラをちらしたよう。目は夜の闇に、10メートル以上先にある黒い布のうへの小さな蟻を見分けるであろう。これは力において象、背丈においてラクダ、激しさにおいて獅子に匹敵する」として、「この斑馬には…」に続いておりますから、これが斑馬だったんですね。

これだけはっきりとですね。当時の人たちが、10世紀と言いますから、日本でいうと、そうですね。ちょうど『後撰集』や『蜻蛉日記』ができた頃になりますよね。その頃の西の方の英雄叙事詩にはこの斑馬が登場いたしまして、これだけはっきり書いてあるんです。そうすると、これを読みながら、そのまま、「尾駁の駒」に当てはめるとですね。なるほど、その名馬とされているのも何となく分かるなあということになってきますね…。

それで、後の方に図を入れておきました。図版の①と②にがそれになります。11ページになりますか…。11ページの①「ロスタムの乗馬・ラクシュ」。これは8世紀の壁画に書かれていました。残念ながら、元の壁画は剥落(はくらく)しているものですから、斑であることは図版に出て来なかったんですが、足の方の先がかすかに白くなったりしております。そして、それを手本にいたしまして絵に書いたのが、岩波文庫に『王書』という本が出ております。そのカバーのカット絵として出ているのが右の方で、これは、実にはっきりとして斑馬になっております。色分けしております。こういう馬を斑馬と言ったんだということが分かります。

元に戻って、6ページです。それでは、日本に一番近い中国ではどうであったかということ、ここにありますようにですね、斑馬ってのはこういう馬だっていうことを、このように書いております。いくつか見て行きますと、「筋骨はすっきりと通り、尾はふさふさと垂れ下がり鬃はそろって立ち、二つの目は鏡を入れたように、二つのほお骨は月のようだ。優れた体格は峰のように、優れた姿は他にぬきんでている。その速く走ることと云ったら、轍(わだち)も塵(ちり)を残さず、物が消え失せるよりも迅速(じんそく)である…」と。こういうことで分かりますように、とにかく、身体ががっちりしていて、斑であったことはもちろんですが、身体ががっちりして、非常に走るのが速いんだということ、次の二番、三番、四番にもありますね。四番あたりを見ますと、「駟駁(かまだら) …」。「黒と黄色の駁であって、日に五百里行くという話であるぞ」と。いうふうな、まあ、よくもたくさん、こう書き並べてあるもんだと思いますけれども、七番目は白楽天の「天馬の歌」。「血の汗を流しながら猛スピードで走る天馬のような馬」これが駁馬だというふうに述べおりますから、とにかくスピードがあるっていうことなんですね。スピードがある…。駟(りょく)〔緑色の名馬〕でスピードがある。どれを見ましても、あんまり、荒々しいとは書いてないでしょ？ 気性が激しいとか。そういうことは書いてないんですね…。

4 何の役に立つの？

さて、そういうふうなスピードのある馬ってのが、一体、何の役に立つのか？あまり、「尾駮の駒」に関する論文を見ましても、「尾駮の駒」が何の役に立ったか？なんてことは考えないですよね…。我々は、おそらく乗馬であろうということぐらいなんです…。それをバカみたいに調べてみました。

まず、えー、北欧へ行きますと、この「北欧神話」というのは随分古いんですね。そこには、白の鬣(たてがみ)のフリムファクシというのがいて、これは、太陽の乗る車を牽くんだ…。太陽はどうして動くのか？ってことで、昔の人は、“馬が牽く”と考えていたんですね。その“車を牽く馬”っていうのが「白の鬣」ということで、わざわざ鬣が白であると書いているんです。ということは、他のところは白ではないってことですね…。これは。そうすると、まさに尾駮だろうと思います。「尾駮の駒」ですね。

そして、ペルシアへ行きますと、さきほどのロスタムがそうであったように、これは間違いなく乗馬として使っている。インドではどうであったか？ 神様が乗る馬なんだ…ということで『リグ・ヴェーダ』にはですね、その斑点のある馬を御して、そして神々がみんな急いでいるということで、神様が乗る車を牽く。さきほどのは、太陽を牽く馬。これは“神様の乗っている車を牽く”。その次二番。同じくですね、神様の乗る車を牽くんだというふうに、インドの古典には書いてあります。そうすると、今までわかってきたことは、一般の人が乗るってことよりは、その斑の馬に乗っているのは英雄である。“英雄が乗るんだ”ということで、さらに英雄からもう一歩進化いたしましてですね。“神様の乗り物”だ…とこういうふうなことです。

次の7ページ。中国に行きますとですね。途端に現実味を帯びてきまして、ウイグルの駮馬国ではこれを食べる。肉を食べる。そして、乳酪をとるというんですから、これ、おそらく「馬乳酒」のことでしょうかねえ？というようなことがありと書いております。

そして、二番目。駿馬だから、やはり、英雄や皇帝の乗り物であるということで、次に、一、二、三、四、五と、ずうーっと具体的にわかるような英雄の名前を挙げておきました。項羽、二番目劉備、唐の太宗だとか、ずうーっとありましてね。明の時代の李自成に至るまで、英雄や皇帝は皆んな、こういうふうな馬に乗っていた。項羽の乗っていた馬は、蒼白の雑毛であった。そして蜀の皇帝・劉備の乗馬も斑の馬であった。ということで、英雄・皇帝の乗る馬っていうのは斑の馬であったのです。

私たちが馬を見て、「きれいだなあ〜」っていう神々しさを感じますのは、私たちの世代で言えば白馬だった。わかりますか？白馬に乗られる方っていうのは、かつては、天皇陛下ご一人だったでしょ？ですから、白馬は一番神々しい馬であって、英雄、それから皇帝の乗り物だと思っておりましたら、実はそうではなかったということなんです。それよりは、斑馬の方がはるかに高かった。あんまり、白馬に乗っている神々とか、神々の乗っている車を白馬に牽かせるっていうのは、全く出て来ません。こういうことだったんですね…。そして、さらに釈尊や如来の乗り物もまたそうであったと…。

モンゴルでは、英雄叙事詩『ゲセル・ハーン』という英雄が出てまいりまして、彼は「黒い首、白い尾の黄斑毛の馬に乗って、黄色い矢筒を腰に下げている」というのがありますが、これも斑馬です。そして、高句麗では「だいたい色の斑の茶色の白馬を献じた」んで、それで、高句麗の

王に任ぜられたという記録が出てまいりますので、高句麗の時代には、いかに斑馬というものが尊重されていたのかが分かりますね。

そして、日本では多くないんですけれども、百済の渡来人、先ほどの伯孫という人の乗馬がその斑の馬であった。外国より比較的少ないのです。

その次の二番目の例は、非常にユニークな話なんで、おそらく『万葉集』以外にはないだろうと思います。「愛人の許に行く」。この“愛人”ってのは、『万葉集』に非常によくあるんですね。妻のことも言うし、いわゆる妻以外の女性もひっくるめて、ちょっと表現の仕様がなないもんですから“愛人”としたんですが…。愛人の許に行く時の乗馬。最もユニークな「驄馬」だ…。乗ったのは柿本人麻呂です。柿本人麻呂が石見国の妻に別れて上京する時の歌で、「青駒の 足搔(あがき)を早み 雲居にぞ 妹(いも)が辺りを 過ぎて来にける…」と。

それで、「青駒」の注釈を見ますと、こう付いております。「白色に黒色か濃褐色の混じった茸毛の斑馬のこと」であると。これですね。そうすると、人麻呂が乗っていたのは、斑馬に乗って、それが「足が非常に速かった」ということを、これは、今まで話をしてきました、斑馬の特色の「スピードがあった」ということと一致しますよね…。それに乗って来て、あつという間に「妻のところから飛び過ぎてしまったよ」というんですから、人麻呂はですね、その“スピード感のある斑の馬に乗って愛人の許に通っていた”というんですね…。

今まで話してきたのは、皇帝であるとか、英雄であるとか、神様であるとか、非常に上の方の人たちだったのですが、一変に下がって来ましてね、人麻呂のなどは貴族階級の一番下ですよ。その人まで乗っていた…。なぜ、乗っていたかということ、スピードがあるので、早く妹(いも)のところ、妻のところへ行って、そして戻ろうということで乗って行ったというんですね。石見国…。まさか飛鳥から鳥取県へ、このスピードある馬に乗って行ったとは思われませんが、それほど“斑馬はスピード感があるんだ”ということを、万葉の歌人たちも知っていたということです。

その次の三番、ペガサス(天馬)。ずーっと時代は下がりまして、10世紀の中頃の『宇津保物語』に出てまいります。「波斯国(ペルシア)の海岸に漂着した清原俊蔭」というと男の前に、忽然と鞍を置いた青馬が現れ、(斑馬ですね…。)そして、俊蔭を乗せると飛びに飛び、梅檀(せんだん)の林に着くと俊蔭を降ろし、かき消すように消え失せてしまった」というんですから、並の馬じゃないですよ、これは…。青馬っていうのはそういうふうな性格を持っていて、どこにいたかということ、西の方のペルシアにいたんだということを、平安の物語には出てまいります。

そして同じく『宇津保物語』を見ますと、次のような記載があります。このペルシアの方に漂着した俊蔭の孫の仲忠は、友人たちと紀伊国の大富豪の邸宅に遊びに行きました。そして、土産に牛や馬をもらったんです。友達がもらったのは、「いかめしき馬」「よき馬」「黒鹿毛」そして「黄色い牛」だったと。それに対して、仲忠に対しては「様々な斑馬」をお土産として贈ったと…。また「黒斑の牛」であったと。この物語の主人公に対して贈ったのはですね。並の馬ではなくて、はっきりとですね、「斑の馬」だと書いてあります。そうすると、これが、斑の馬がどういうものであるかということ、少なくとも『万葉集』を通し、10世紀の『宇津保物語』の人たちにまでこの観念が残っていたんですね…。それをはっきり、こうやっていうことができますが、もう『源氏物語』になりますと、全然出て来ないんです。これで、終わりなんですね…。

5 斑馬に託されている思想は？

その思想とは一体何なのか？ 第一番、聖獣だということです。

中国。「青い身で白い鬣(たてがみ)と尾の斑馬は神馬で、河の精であり、帝王の徳が山の如くであれば出現する」「聖天子が即位すると、赤い模様のある馬が現れる…」。

実際にあり得ないようなところまで、斑馬が昇格しちゃっているんですね。

朝鮮。神馬とは、「青と白の葦毛の馬」であると。というふうになって、高句麗の古墳などにもこれが書かれております。

さて、日本ではどうであるか？ 何回も何回も引用しますが、先ほどの伯孫という、8ページ一番目です。その渡来人が乗っていた「驄馬(みだらをのうま)」のというのは、これは、応神天皇陵〔誉田(こんだ)陵〕に捧げられたのですが、応神天皇陵に配されていた土馬に化してしまふ。“陵(みささぎ)を守る”。土馬が陵の馬であった。

そして、その次の二番目。そういう土馬でもって、土馬というと、たいてい土色を考えるんですが、そんな斑の馬があるのかと思うておりましたら、9世紀に、“伊勢神宮”の神官が書きました『皇太神宮儀式帳』にですね。“伊勢内宮の別宮である荒祭宮”、内宮にたくさん別宮がありますが、その中の荒祭宮の尊い財産として「青色の土馬一疋」という記載がありました。“青色の土馬一疋”。そうすると、土で作りながら、私たちが見るような土色の土馬じゃなくて、色を塗ったんですかねえ？ そうすると、青色というのは先ほどの人麻呂の歌にありましたように、白に青の斑ですよ。そういう色に塗ったものが、これが非常に尊い財産だとして、伊勢神宮では大切にしていたというんです…。

私、これを是非見たいと思うんですが、残念ながら、9世紀の記録に出て来るだけであって、現実には存在しないんです。それでも何かないかと思ってしきりに探しておりましたら、出てきたのが「伊勢斎宮」。ちょっと離れていますね、伊勢神宮から。伊勢斎宮跡から大型の土馬が出たんです。図の4をご覧ください。11枚目、11ページです。その真ん中のところに、二段目にデ〜ンとして右側に出ております。伊勢斎宮跡の土馬。これが「斎宮歴史博物館」に展示されております。これが、青馬であると非常にうれしいんですけど、残念ながらこうやって土色だったんです。しかし、きっとこういうものであったかもしれないということと、やはり伊勢神宮の方の青色の斑馬の土馬が尊重されており、そして、伊勢斎宮跡にもこういうものが出て来るってのが、「これ、貴重だなあ〜」というふうに思ったんですね。

そして、この土馬の全体に点々と黒い斑点が入ってますでしょ？ これは…。これは、竹の管でもって付けたんですね…。これ一見見ますと、何かの飾りのように見えますでしょ？ これはね…。私、これを見まして、斑を表しているのかと思ったんですね。ところが、ちょっと困ったことには、真中に馬の鞍がありましてね。その鞍の上にも点々としてありますでしょ。そして、まさか鞍までが斑っていうことはありませんので、そうすると、この点々はきっと飾り馬の飾りですね、模様でもあるかもしれないなあと思ったり、しかし、まあ、強いて言うならば、鞍の方はそうであっても、他のところは、これは、あるいは斑を表しているのかも知れないという目で見て見ますと、何となく黒ずんで見えたりしましてね。私の身体のどっかと似ているなあ〜というふうに思ったりして…。

それならばこの土馬と同じように、こうやって竹の管で模様を持っている土偶はないかと思ひ

ましたら、8枚目に戻ります。その8枚目の「日本」の二番目。鳥取県「坂長ブジラ遺跡」出土の、その土馬の頭の部分ですが、そこに、竹管の模様があるというんですね。これは、全体じゃなくて頭のところしか出ていないんですけども、その頭のところに、こうやってやはり、管で模様を付けているというんですね。これは、全体が分からないと何とも言えませんが、何かやはり気にしておいていいかなと思ひまして、ここに挙げときました。

このように斑馬は、非常に神聖なものというふうと考えられていたんだということがお分かりになって頂けるだろうと、こういうふうに思います。

そして、その次は、斑馬を神の馬、神馬として献上しているということです。斑馬が出ると“王者の徳の高いしるし”であるぞということで、甲斐国・信濃国から黒い身で白い鬣(たてがみ)と尾を持つものが献上された。対馬からは、青い身で白い鬣と尾を持ったもの。肥後国からも白い鬣と白い尾をもった青馬が献上されたということで、しばしば、こうやって駿の馬、白色系統で駿をもっているものが献上されているんですね。こういうものを献上しますと、褒美をもらえるもんですから、争ってこういう馬がないかと探してですね、献上したんですね。その一部が、このように『続日本紀』に記載されているんだろうと思いますね…。

段々と、この白色系の斑馬というのが神格化されて来ているんですね。めでたい。そして、ついに、次の4にまいりまして、平安になって、「白馬」と書いて依然として「あおうま」と読ませている。「白馬(あおうま)節会」が行われています。平安時代の正月の宮廷行事です。元来は斑の馬で、白色に黒色・濃褐色の混じった茸毛四つ白の青みがかかった斑馬であったと。こういうものをお正月に見ると年中の邪気が祓える…。こういうことだったんですね。“青い”というのは、やはり東西南北で言いますと東であって、「青春」の「青」という字ですよ。これから一年間が青春のように、そして若返るように、青いものを見る。東の方を見て青いものを見るという行事が中国から始まって、日本でもスタートします。正月の行事として、白馬を宮廷に牽き出して、それを皆が眺めるということが行われるようになりましたですね。

そして、その次には、先ほど挙げました「天馬(ペガサス)」で、『宇津保物語』の馬がそうでした。そこに、図の3として掲げておきましたけれども…。えー、11枚目。先ほどの「伊勢の齋宮の土馬」の左側に見えています。しかし、これは江戸時代の物です。江戸時代の版木に彫った『宇津保物語』でありまして、その中の挿絵(さしえ)なんですね。右下のところには何人か男が居りまして、おそらく、真中に立って見上げているのが仲忠だと思いますが、その上のところに、黒くなってしまいましたが、黒い馬が雲の中を駆けているのが見えますね。これが斑の天馬であったと…。こういうことです。もう少し、白い色の絵があれば良かったんですが、それが見つかりませんでした。

そして、その下の⑤のところ、「白馬節会」を書いた、時代が下がりますが、絵巻がありまして、宮廷の門のところから白い色になっちゃいましたけれども、それを牽いて出て来るということが行われておりますですね。これが「白馬節会」です。

それでは、前に戻りまして、8枚目に戻ります。斑馬にどのような思想を託(たく)してきたか？今、話をしてきましたのは、斑馬は“聖なる馬”であったという系列をずうっと、中国から始まって日本まで見てきたんですね。で、もう一つ、指摘しておかなければならないのは、斑の馬っていうのは、「太陽神への犠牲獣」であるということです。“太陽に捧げるための馬”である…

と。こういうことですね。

それで、1、2に書いておきましたけども、先に二番の方を見て頂きましょうか。太陽に馬を贈る習俗があった。太陽に馬を犠牲馬として贈る習俗があった。「古代ギリシア人は、太陽は馬車に乗って天空を駆けると信じていた。太陽を崇拜し、馬を太陽に捧げるために、海に投げ込んだ」と。太陽っていうのは、非常に不思議な存在。古代人は不思議に思いましてね…。どうして、毎日毎日、東から西へ走って行くのか？ どうして、そういうことができるのか？と考えると、エジプトなどは「船に乗って行く」と考え、やがて馬車が出てきますとですね。「馬車に乗って行く」と考えたんですね。そうすると、天空の世界で一番力が強くてスピードがあるのは太陽である。地上の世界において、一番力があってスピードがあるものとは何か？っていうと、馬だったんです。それならば、毎日毎日、太陽を牽いてくれる馬に、実際の馬を犠牲として捧げたならば、もっと太陽神は喜ぶだろうと考えたんですね。それで、馬を犠牲にするっていう習俗が西の方から生まれたんです。そして、その習慣がですね。東の方へ東の方へやってきて、最後にどこにたどり着いたかという、日本列島の『古事記』『日本書記』の世界に根を下ろしたんです。

何かというと、有名な神話ですね。「アマテラスの神話」です。「スサノオは天斑駒の皮を剥いで、太陽神アマテラスに投げ込んだ」と、こういう話があります。それで、アマテラスも怒ってしまって、「天の岩戸」に隠れてしまったという神話になる…。そこで一大イベントが展開するんですね。その日本神話の中の、言わば、一番中心をなす骨格の部分である「天の岩戸」の話というのは、起こりは、スサノオが駒を剥いで、アマテラスに投げ込んだということがメインなんです。それだけですと、私はあまり気にしなかったんですけども、その駒が斑駒となってですね…。斑駒なんです。斑駒…。その一、一般の考え方といたしましては、非常にスサノオが乱暴だったんで、それで、馬の皮を剥いで投げ込んだということだけで止まっちゃったんです。それならば何も、斑の駒じゃなくて、普通の馬でもいいわけですよ。何で、斑だったのか？これは…。今までの話でご理解頂けるかと思えますけども、斑の駒っていうのは、これは神聖な馬だったんですよ。神聖な馬…。神聖な馬をどうして、スサノオは剥いだのか？そして、それをアマテラスに、太陽神に投げつけたんでしょ？というふになっておりますが、頭の中で考えますと、こちらに神聖な斑の駒がいて、こちらに太陽神がいるんですよ。この二つからある程度言えるでしょ。何が言えて来るかという、**“太陽を牽くのが斑の駒”**である。で、西の方の国々では、**“馬の皮を剥いで、犠牲にして太陽神へ捧げるんだ”**と。こういうことと、全く同じ構図なんです。これは…。そうすると、「スサノオの話」いうのは、乱暴だったということじゃないんですよ。馬を犠牲にして太陽神に捧げるという西の方の話が、ユーラシア大陸をずうーっと通って来てですね。モンゴル辺りを通って来て、日本列島に入るにあたり、だんだん、々々、話に変化しちゃって、日本列島に入って来た時に、どうしてもアマテラスがと尊くなければいけない。それに対して悪者が必要になるんです。誰を悪者にするか？っていうことで、引っ張り出されたのが、あのスサノオだったんですよ。よく読んでみますとね。アマテラスとスサノオは姉弟関係は全然ありません。つながってないんです。それを無理にくっつけちゃって、姉さんに対しての乱暴だとしてしまったのですね…。ですから、本来の形っていうのは、斑馬は神聖であって太陽神に捧げるというのが、実は一番、話の根っこにあったはずなんです。斑馬の流れを見てきますと、初めてそこに到達するんですね。でも、多くの神話の研究者はそこに目を向けていないんです

から、依然(いぜん)として、“スサノオが乱暴であった”“嵐の神”であったと言っております。そうじゃなかったんですね…。それから、この“太陽神への犠牲の獣として、斑の駒を捧げる”という、ユーラシアを通過して来た、一番最果ての話が『古事記』『日本書紀』に残っていたんだと、こういうことです。

あの一、日本列島っておもしろい所ですね…。ユーラシア大陸の一番はじっこにありますでしょ。あれ、ユーラシア大陸とは言わないのかも知れませんが。しかし、大きな地図で見えますとね、日本海なんてのは、ユーラシア大陸の一番はじっこにある湖ですよ。それで、列島は大陸にくっついちゃっているんです。そうしますとね、西からやってきた文化というのは、文化というのは不思議ですね…。あんまり、めったに、ゼロとは言いませんけれども、東から西へというのは非常に少なく、皆、西から東へ文化は流れるんですね。太陽の動きと関係があるんじゃないかと思うんですけど。東へ東へと文化は流れるんです。そうしますとね、ユーラシア大陸をやって来て、そして沿海州から日本列島へ行くか、朝鮮半島を経由するかによって、行き着くところは日本列島で、その先はないんですよ。そうすると、長い二千年、三千年、四千年の文化というのは、後から後から、皆、日本列島に入って積もっていくんですよ。そうしますとね、日本人というのは、非常にものを尊重する体質の民族であって、要するにケチなんですね。物資が少ないから…。入って来たものを皆、後生、大事にして、壊すことをやらないんです…。

ですから、色んなものが全部、こう、積もっちゃっているんです。その例としてよく、私が挙げとりますのが、先ほど「雅楽」を拝見いたしましたけども、「雅楽」なんか、随分古いものでしょ。平安時代。その「雅楽」もこのように見ることができれば、そして、時代が下がってくる室町時代の「お能」を見ることができれば、江戸時代の「歌舞伎」も「文楽」も「人形芝居」も、それから「新派」「新劇」、「アナグラ演劇」も、全部見ることが出来ますでしょ。外国はそういうことはないですよ。新しいものができる、古いものは皆消しちゃうんです。日本人は非常に大切にしておいたものですから…。乗り物で言いますと、最後の終着駅のようなものでしょ。全部、積もっちゃっているんです。

ですから、日本の文化を分析しますとですね、逆に、昔の方がよく分かるんですね。今言った「アマテラスの話」も、私はそういうものだと思います。積もり積もってきた、そして、昔からあったものが、ああやって日本の神話に形を残しているんだらうと。そういうふうに思いますね。斑の馬もそうなんです。単に斑模様であるということだけじゃなくて、今、話してきた、神聖であるという性質の中でずーっと、西から東まで駆けつけてきたのです。尾駁の牧まで…。

6 斑模様の動物は聖獣だった、牛も犬も鹿もそして馬も

さて、ここまでは、馬についての話をしてきましたんで、そこで、もう少し目を向けて見ますと、私の顔を見ますと、斑が顔に出てきておりますようにですね、馬だけじゃないんですね…。人間もそうであれば、動物も皆、そうなんです。その斑の動物を崇拝する、何が一番始まりであるかという、どうもエジプトでですね。斑の牛を尊重したという話、迦(さかのぼ)って行きますと、これが一番古いんじゃないかと思うんですね。エジプトでは牛であった…。

「偉大な人物が現れると、聖牛アビスが出現する。アビスは黒牛で眉間に三角の白い斑点、背中に翼を広げた鷲の模様の斑点があつて、舌にはスカラベ形の斑点があつて、尾の毛には白黒二

重、つまり、黒白斑の牛であった…」と。一体、こんな牛、現実に存在するんですかねえ？これは…。実はいるんです！それが発見されますと、人々は喜びましてね、これを聖牛として崇拝するんだということで。何かアビスの好い絵はないかと思って、ようやく、探しましたのが 11 枚目の⑥。それから 12 枚目の上の同じく⑥。それから⑦で、これは斑がはっきりしております。こうやって斑の牛というものがエジプトでは尊重されています。遡っていきますと、斑の動物の尊重というのは、どうもこのあたりにいくらしい…。そうすると、何で斑なのか？という解明もですね、日本の斑馬を突っついたって出て来ないんです。エジプトまで行って、そして考えなければならぬということです。

二番。さらに東に行きまして、オリエントへ行きますと、犬も斑です。ゾロアスター教には、「最初の間人は豹の斑の毛皮を着た王だ」という神話が残っている。この人は、その一、豹の斑の毛皮を着なければ、肌が斑でなかった。私などは着なくても前身あちこち斑…。うらやましいなど、私は思っているんですけども。

それはともかく、同じくゾロアスター教では、「灰色に黄褐色の斑のある犬」を、これを“聖犬”として尊重している。現在でも、ゾロアスター教徒は「白と黄色の斑犬、目の上に茶色の点がある犬」を“聖なる動物”として、死者を葬儀場である沈黙の塔まで先導している。

中国も同じで、犬である「騶虞(すうぐ)」は斑で、例の「麒麟(きりん)」も斑でしょ。聖天子が現れるとこういう斑の動物が出て来るんだと言います。さらに、現実に騶虞のいない時には、藁(わら)でもって作ると…。次の二番目です。そして、少数民族のシャーマンの叙事詩にはですね、冥界へ行く時に車を引くのは四つ目の黄色の犬が引っ張って行くということで、盛んに斑の犬が活躍いたします。

それでは日本はどうかということで斑のある動物を探しますと、確実に目に付きますのは、鹿がそうでしょ。何で、奈良で鹿が“神の乗り物”として尊重されているのか？ということで、なるほど見た眼には、目が細くて、身体もきれいですし、そして角があって立派ですよ。それだけじゃなかったんです。やはり“斑である”ってことが非常に大きな影響をしているんですね。

それならば、斑の鹿の尊重は一体、どこまで遡れるかということで、至急探しましたんで、出てきたのがですね、6世紀の埴輪です。図の8をご覧ください。鹿の毛皮を着た巫女の埴輪が出てますね、これ…。点々がありますから、明らかにこれ、鹿の毛皮を着た巫女の埴輪です。これ、「土下(はした)遺跡」(鳥取県北条市)からの出土品です。そこに、あまり大きくない「北栄町北条歴史民俗資料館」がありましてね。私、夕方、そこへ行きましたら、これがあったんですね。これには驚きました。長年、探っていたけれども、埴輪でもって、鹿の毛皮を着たものはなかったんですけども、これはすばらしい発見だなど思いましたもんですから、ここに入れたとききました。

そうすると、すでに埴輪の時代からですね、こうやって、斑模様に対する崇拝の念があって、それがこうやって、シャーマンから巫女まで、斑動物を尊重していたことが良く分かりますね。斑のある動物を聖なるものとして、こうやって犬だけじゃなくて、馬だけじゃなくて、いろんな幅広くですね、こうやって尊重していた…とこういうことでございます。

7 東北地方にはいつから馬がいるの？

さて、こういうふうに見てきますと、何かユーラシア大陸のですね、西から東の方へが話題になり、南の方の、つまり“江南”と言われている、あるいは稲作が伝わってきた、あの辺りではなくて、皆、北の方になっちゃってんですね…。主として、北の方の、一般に言う“シルクロード”っていうのは、やや下です。その上にですね、“草原のシルクロード”ってのがありまして、モンゴル辺りからシベリアを通過してきます。その辺りの民族がしきりに、この斑馬を尊重していたように感じられますね。最初はエジプトかも知れませんが、それからずーっと、北の方に行って、北のルートを通って、東へ東へやってきたような感じがするんですよ。だとすると、北へ北へとやってくると、その果てにある日本列島も、やはり北でなければならぬと頭で計算しておりましたら、それが、この青森県にぶつかるんですよ…。

北の草原地帯からやってきた斑馬の信仰、さらに斑の動物の信仰というものが、東へ東へやってきて、主として草原地帯、北の方を通過してやってきて、そして青森県へと考えますと、これ、南からというよりは、対岸から直接、青森の方へこの斑馬の信仰というものが入って来たんじゃないか？っていう、計算になっちゃったんですね…。

そこで、それならば青森県で、馬の出土がどうなっているか…と。一般に馬というのは、5世紀から6世紀でしょ。しかし、もっと古くからあってもいいんだけど…。と、そこに出してあるように、5世紀にですね。既に馬の歯が出ている。岩手県からは、3体分の馬の歯が出ておりますよ…。

そして、その後ですね。これ、5世紀なんですよけれども、その後しばらく途絶えてしまって、次に出て来るのが7世紀なんです。これになりますと、南の方、近畿日本を中心にいたしまして、馬の文化が発揮いたしますから、南から入って来てもおかしくないんですよ。そうすると、それに先立ってポツンと、この5世紀のものがあるってことは、やはり気になるんですね…。これ、文化の流れが別じゃないかと…。

そして、次の二番目。東北地方には「相染・蒼前・宗善・相膳」(そうぜん)という、「四ツ白」の葦毛を尊重する、その一、お祭りがしきりに行われている…。ということを見ますと、やはり、東北の方には、こういうものを尊重する信仰心があるものかもしれない…。

さて、そうしますと、「海の方から渡ってくる…」とすると、どうやって渡って来たのか？これは南の方であっても、近畿であっても、九州であっても、どっかで船に乗らなければ、馬は来ないわけでしょ？。そうすると、南の方で海を渡って馬が来たということは、北の方にも、海を渡って来てもおかしくないですよ。そうすると、青森の海の対岸の方から、船に乗せられてこちらへ来たということも、考えて良いのかも知れない…。そうすると一体、当時の対岸の海の民族が何であるかということ、最後に書きました。

中国史に現われ、日本史には北海道辺りに渡来して、そして下がって来まして、佐渡ヶ島にも漂着をしているという「肅慎(しゅくしん)」という民族が居ります。古くは「挹婁(ゆうろう)」とも言うておりました。これを、唐の時代に書かれた歴史書(唐『晋書』四夷伝)で見ますと、「馬がいるが乗らないで、ただ財産とするだけである」と、あるんですね…。「肅慎」という海の民族は、“馬を財産として大切にしている”ということ。そうすると、そういう民族が日本列島に来ていれば、“財産であれば持ってくる”ということも、まんざらあり得ないわけではない

という、点と点を結ぶ、そういう線を考えていたりしているんですね。

この「肅慎」という民族は、ずいぶん、後々までも日本に流れ着いております。これは、そうですね。何も直接、海の方からまっすぐ来なくても、向こうのリマン海流に乗りまして、ずうーっと南下して、そして、千島海流に乗りますと北上しますからね。ぐうーっと回ります。かつて、北海道で地震があった時に流された北海道の船が、二ヶ月かかって能登半島に着いております。ということは、二ヶ月かかると着くんですね。とすると、漂流した船に、仮に馬が乗せられて居れば、ぐうーっと回ってですね。東北の方に来ることも、まんざらあり得ないことでもないなあ〜と、そういうふうを考えたり、空想をしております。

8 斑馬・駁馬・駁馬・驄馬の色・模様の複雑さ

さて、それで、一体、斑馬の模様はどんなものがあるか？っていうことで、そこに、9ページのところに、ずうーっと、分かる範囲で表にしておきました。

「地」の色は、例えば白であって、「体」には青い斑点とか、赤い斑点があって、「鬣」はこういう色であって、「額」はこうであって、「口の辺り」はこう、こう、こう…と。そして、こういうふうに生まれている…と。で、具体的には、それに乗っていた人たちにどういう人がいるかっていうことを、最後のところにですね、「漢武帝」であるとか、「劉備」であるとか、「唐太宗」であるとか、「李自成」とか、そういう人の名を、ずうーっと入れておきました。これをご覧くださいと、ある程度斑馬のことが分かるかと思えますね。

おわりに

最後に、10枚目のところに、ここまでは、ずうーっと、こうやって斑馬を挙げてきましたので、こういうふうなものもありますよ！ということで、洗いざらい、私が現在まで、探り出して分かったものを、そこに図版として入れておきましたんで、また、ご覧になってください。ただ、どうも、その一、フォトがあまり良くないもんですから、さらに、それをコピーしておりますと、「一体どこが、斑なんだろう？」というふうに、迷うところも出て来るとは思いますけれども、その点は、そうだったのかということですね。ご了解ください。

特に13枚目の⑮。そこに、「敦煌の旗」が入れてあります。これ、全然、わからないでしょ…。どこが斑やら…。これは、もう、終わりましたかねえ？ 東京で「大英博物館展」やってたんです。つい最近ですね。そこへ行って見ておりましたら、「敦煌の旗」が出ておましてね。よ〜く見たら、これ、下の二匹が斑だったんですよ。写真撮影はできないもんですから、図録を見たのですが、それにもですね、斑、出てなかったですね。それで、これは良い発見だということで、ここに入れておきました。後はまた、ご自由にこうやってご覧なさってくださいれば、こんなに、たくさん斑の馬がいたのか、斑のような動物がいたのかということが、お分かりくださるかと思えます。

さて、最後にそういうふうを考えてきますと、私が、繰り返し繰り返し、強調したのは何かと言いますと、斑の馬というのは、斑の動物というのは、非常に「神聖な存在であった」ということなんです。「聖なる存在であった」ということ…。

それでもう一回、『後撰和歌集』の歌を見てください。10枚目の最後をご覧ください。

「尾駮の駒」の本性は、聖獣だったということです。

「陸奥の尾駮の駒も野飼ふには 荒れこそ増され懐くものかは」

聖なる尾駮の駒も野放しにしておくと、荒れ勝るぞ…と。これは、いいですよ。荒々しくなるぞ…と。なづけることはできんぞ…と。これは、奥さんに向かって言ってるんですね。女人を、奥さんを野放しにしておくと、荒々しくなっちゃって、名づけることはできないよ…と。くれぐれも注意するよにと。という歌らしいんですよ。

それで、よく見てみますとですね。「尾駮の駒も…」と書いてあるんです。「も」と書いてあるんです。「も」…。「尾駮の駒は」じゃないんですね。これはですね…。「陸奥の尾駮の駒は」「野飼ふには」「荒れこそ増され」と。「尾駮の駒」は荒れ勝ってくる…と。こういうことで、一般の解釈になるんです。

しかし、「も」と書いてあるでしょ。これは。「も」という助詞は非常に重要なんで、この変化というのは、「…であるものでさえも」っての、あの「も」なんです。そうすると、「あの神聖な尾駮の駒でさえも、野放しにしておくと、神聖さが薄れてしまって、荒々しくなってしまうぞ…」と。そういう歌だったんですね。ですから、この歌は、「荒れこそ増され」を強調しちゃいけないんです！ 強調するのは、「尾駮の駒も」という、ここのところだったんですね。

えー、私は、ようやく四～五十年かかってですね。この答えに到達したんですね。

さて、これで、この「尾駮の駒」の話も終わりました。そうしますとね…、動物にしても、馬にしても、犬にしても、そして人間にしても、斑模様というのは神聖なんです。私の顔にシミが出てきて、斑になってきた…。私も神聖なところに到達しているんですよ。神々の世界に…。やがて、年が年ですから、この神聖さをもったまま、文字通り、神の世界に入っていくだろうなと思うんですね。

今回は、良い話をさせていただきました。ありがとうございました。

(会場、大拍手)